

---

# 狂って候

山田太郎左衛門

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂つて候

### 【Zコード】

N7739M

### 【作者名】

山田太郎左衛門

### 【あらすじ】

男に捨てられたショックから自傷行為に走る「私」はその凶行と、合間に訪れる正気の狭間で揺れる。

そして「私」は「狂気」とっては、自らの救済の記録であり、正気にとっては救いを求める唯一の手段たりえる」と考え、手記を書き綴るのだった。

## 手記

私がこの手記を書く時間は減り続けている。それは私が正気を保つて、自らの日常を振り返ることが、段々と出来なくなっているからに他ならない。それでも私は可能な限りにおいてここに自らの正気と狂気の記録を書き続けるだろう。それは私の狂気にとっては、自らの救済の記録であり、正気にとっては救いを求める唯一の手段足り得るからである。

あの人にとって私が取るに足らぬ存在であったことは、既に自覚していたが、それでも彼を縛りつけようと考えたことは、今となっては恥じ入るばかりの不明だといえる。けれど、そのときの私は、唯一考えうる手段として、それを彼の前に差し出した。

私と彼とは、なにひとつ接点を持つてはいなかつた。私は彼の本名も、住所も、職業も知らず、彼がこの部屋のドアを開ける瞬間を毎日焦がれて待ち続けるばかりであつた。彼にそれらの情報を求めたことがあつたが、「そんな関係じや無いだろ」「とただの一言で済ませてしまつ、そんな程度の間柄だつた。

私は彼をこの部屋に、私の元に縛りたかつた。だから、あの子が出来たときは、本当に嬉しかつた。私は墮胎できぬよつな段階になつてから、そのことを彼に告げた。私の少し膨らんだ下腹を見て、彼はなんとも言わず、部屋を出て行つた。そしてそのまま一度とこの部屋に訪れるることは無かつた。

私は自らの不明を呪つた。何故あの時、彼を縛りつけようと思ったのか。黙つていれば良かつたのか、それとも墮ろしてしまえば良か

つたのか。彼との関係を終わらせたのが、自身であるという悔やみだけが残っていた。この部屋に残る彼の影はそればかりだった。

窓から差し込む朝日までもが私を責めるような心地がして、厚手の遮光カーテンを引くと、光に慣れ始めた眼に部屋の中はあまりにも暗く感じられた。テーブルの上に置かれた照明のリモコンを、手探りで探し当てるのに手間取るうちに、目は暗闇に慣れていった。ようやく人工の光を仰いだときには、その光すら眩しさをもって私の眼を責めたてた。心がざわついた。

最近の私は些細なことにも苛立つている。その原因となっているのが自分自身である以上、憑き物のような癪癩が解消される手段は判らなかつた。この身体も、この心も、彼に捨てられた私の全てが忌まわしくて仕方が無かつたのである。私は衝動に任せて部屋の中を暴れ回つたが、この苛立ちを紛らわすには足りなかつた。それどころか哀しくさえなつた。何かに對してハツ当たりをしている自分が哀しいのだ。本当は傷つけるべき立場に無いことが判つてゐるからかもしない。傷つくべきなのは私の方なのだ。罪を負うてゐるのは私なのだから。そう気がついたときから私の中で何かが狂い始めた。

私の目の前には小さな血溜まりが広がつてゐる。その中に、ところどころ浮島のように白い陶器の欠片が見え隠れしてゐた。さつきまでは小皿だったそれは、今や私に罰を与える処刑道具であつた。私は破片に向かつて何度も拳を振り下ろした。血が飛び散り、私の身体に斑の模様を作る。

私はこのときあの日から今日まで絶えることなく続いていた焦燥感が薄らいでいくのを感じてゐた。それどころか、心の重荷が少しずつ減り続けるようにさえ思えた。それらの心の動きには、罰を受けることで、自身の罪に許しを請つ浅ましさを含んでいたが、私は知りながらあえてそれを無視した。そして一心不乱に拳を床に叩きつ

け続けた。罰は私の意識が途切れまるまで続いた。

どこかで泣いている声がして、目が覚めた。拳に痛みを感じて、気を失う前まで自身が囚われていた行為を思い出した。そして急に恐ろしくなった。私は意識を失うまで、自らを傷つけ続けた。もし意識を失わなければどうなつていたのだろう。この身が滅びるまで、拳を打ちつけ続けただろうか。

真に恐ろしいのは、今の私の心はこのひと月ほどでもっとも安らいでいたことである。これほど安定して、物事を考えたのは随分久しぶりのように感じられた。そして、ずっとこのままの私でいたいと思っていた。これは、あの行為によつて私が確かに救済されたとう証であつた。今の安らぎを維持するために、私がまたあの行為に囚われるのではないかと考へ、身を震わせた。

不思議なことに、部屋の中は全て元通りになつていて。私が暴れまわつた形跡も、碎けた陶器の破片も、血溜まりも、何事も無かつたかのように消えうせていて。何も無かつたとは考えられない。この拳の痛みとそれを与え続ける傷痕が、あの凶行の事実を証明していた。これ以上のことは何も判らない。ただ、私が見て憶えているありのままだけを手記に書き綴つた。

こうして幾日かを平静に過ごすと、またあの焦燥感が私を襲うのだった。「こんなに安らかでいいのだろうか。私は彼を追い詰めて、私から彼を奪つた張本人ではなかつたか。罰を受けなくてはならない。許されなくてはならない。償わなくてはならないのだ」結局、私は襲い来るこれら衝動を抑える術を持たなかつた。

私は治りかけた傷口に包丁の刃先を押し当てる。そうして指の肉を削ぎ始めた。ゴボウを笹搔きにする要領で肉と皮と爪を削り取つていく。たちまちに床に血溜まりが生まれ、不揃いに切り刻まれた指の破片が湿つた音を立てて落下していった。痛みに涙を流しながら、私は自身の顔が歪んでいくのを感じた。きっとこの時鏡を見れば私

は笑つていただろう。最後に残つた骨に向かつて包丁を叩きつける。それまでの手間を清算するように、とどめの一撃には爽快な音と感触が伴つた。そうして一本ずつ指を切り落としていったが、四本目にとりかかるうとしたところで、私は意識を手放した。震む視界と誰かの泣き声がぶつりと途切れ、何も見えなくなる。

正気に戻つた私は、三本欠いた左手の指を見て狼狽した。ある程度は予期していたことだつたが、狂氣の私にこれほどまでに躊躇いがないことは流石に衝撃だつた。私は未だ混乱状態の自分を信じていたのである。死さえ覚悟しなければならない状態だとは考えたくないがつたのだ。幸い出血は止まつていた。また、部屋は前回同様、何の痕跡も残さず片付いていた。私はこれらの人間を手記に書き綴ると病院に出かけた。

このとき外科に出かけたことが、後に、誤りであつたと考えるところである。私は包帯で巻かれた手を隠しながら診察室へと進んだ。「今日ははどうされましたか」と尋ねる白衣の男に対し、私は黙つて左手を差し出した。医師は「包帯を取りますね」と言つた。おそらく、包帯を剥がす前から、私の左手がどういう状況であるか判つていた筈である。何故なら、包帯で巻かれた左手は、手の形をしていなかつた。親指と人差し指を残して、根元から切断されていたのだから。

「あの、これははどうされたのですか」という医師の問いも、私の予想するところであつた。私が「理由は聞かないで欲しいんですけど」と告げると「いや、理由ではなく、どういう症状なのか、詳しく教えていただきたいのです」と返された。症状も何も、指が根元から先、無くなつているのではないか。私がその旨を告げると、医師は怪訝な顔をして私の手を取つて、色々な角度から眺め回した。そして「中指と薬指、小指の三本は、まつすぐに伸ばせないのですか」と訳のわからないことを言つた。

医師の不誠実な態度は私を苛立たせた。私は痛む左手にまた包帯を

巻きなおすと、診察室を出て自宅に戻った。そこでまたあの焦燥感に襲われ、衝動を抑えることができず、ただ心の思つままに肉体を破壊するのだった。

私は眼窩に匙を差し入れ、瞼を大きく見開いて、眼球を取り出した。そして弄ぶように手の中で転がした後、ひと思いに握りつぶした。硝子体が掌を濡らし、粘ついた液が糸を引く。目玉を引き出したところまでは酷く痛みを感じていたが、一端神経を断ち切つてしまえば痛みなど感じなかつた。それが私には不満だつた。私は足首をきつく縛り上げると、踝から下を切り取ろうとした。包丁でもつて突き刺し、骨の周りの肉を削ぎ落とす。指と違い、肉が厚かつたから苦労した。すっかり骨だけになつた足首を、彼が部屋に残していつたガラス製の灰皿で打ち砕いていった。唯一の不満は、縛り上げたことで痛みが和らいだことだつたが、手首も同じように削ぎ落としたことで満足し、私はベッドに倒れこんだ。あの泣き声がずっと耳について、なかなか眠ることができなかつた。声の正体について考へてみると、意識は闇に溶けていった。

この日まで私は手記を書いてきたが、それももう直ぐ終わるようと思えてならない。これ以上の破壊に私の肉体はもたないだろ。これを読んでくれている人がいるのなら、私が狂氣の中で僅かに正常な神経を保つていたことを信じて欲しい。この手記が何よりの証明だらうと考える。私は狂つてしまつた私を、ここに書き記した。この客觀性でもつて私の正氣を信じていただけるのであれば、私は狂氣と相対する覚悟をしようと思うのだ。あの焦燥感に飲まれず、戦おうと思つのだ。誰かの目に触れるよう、私はここに手記を投稿しようと思つ。ひとつ不安なことは、果たしてこの手記が誰かの目に

触れるときまで、私に正気を保てるのかといふことだ。

## 病室にて

私が目を覚ましたのはベッドの上だった。消毒液の匂いがした。あたりを見回すと、清潔感のある壁の白さが月の光を青白く反射している。私はそれらの状況から病院なのではないかと判断した。ぼんやりとした頭でここにいる自分を回顧してみる。あの手記を特に選ぶことも無く適当なサイトに投稿してから、焦燥感に飲まれてしまつた私の行動を思い出す。

私は自身の首に包丁を突き刺し、意識を失つた。そうであるなら私は既に死んでいるはずであった。けれどここが死後の世界とは到底思えなかつた。それに、手足の自由が利かないと思ったら、私はベッドに縛りつけられていた。身動きできない苦しさに、身を捩じらせて呻く。その声に反応するかのように部屋の照明が輝いた。仰向けに縛りつけられたせいで、光から目をそらすことは容易ではなかつた。

「ようやく起きたかね」という声と共に私の視界に映つたのは、スリーツ姿の中年の男であつた。男が「喋れるか」と問うのに対し、私は頷いた。これでは喋れるということを証明していないと気づいて、何か言おうとしたが、男がかまわずに何事か話し出したので押し黙つた。

男の言うことを、私は殆ど聞いていなかつた。私と相対して、一対一で話しかけてくるこの男の言葉をあえて聞かなかつたのは、無意識としか言いようが無い。私は何も特別な理由があつて、この男の話をすることを聞き流していたわけではないのだ。

「会つかね」と尋ねる男の言葉で、私は意識を引き戻された。私は頷いた。何に会つか判らないが、この白いだけのつまらない部屋に刺激を加えられるのなら、それが何であっても良かつたのだ。

スーツの男が病室の外に声をかけると、二人の警官が部屋に入ってきた。彼はどうやら刑事だつたらしい。彼らが私の腕を縛っていた布を外したことで、私はようやく起き上がる事が出来た。私は手首にひんやりとした冷たさを感じながら、警官と刑事に付き添われて病室を出た。

やけに静かな廊下を、刑事を先頭に進んでいくと、途中から廊下の照明が消えている区画に行き当たつた。非常灯の光だけを頼りに辿りついた部屋は、やはり照明がついていなかつたが、刑事が扉の直ぐ傍のスイッチを手探りで見つけ出し、部屋の中は明るくなる。そこには大小様々な袋がストレッチャーの上に載る形で置いてあつた。刑事は、その中でもつとも小さい袋の前に立つて「これだ」と言った。私は促されて袋のジッパーを開ける。

そこには私の死体があつた。

胴体から首は離れ、手足は切り落とされ、眼球に満たされない眼窩はまぶたを半球状に支えきれず落ち窪んでいる。その小さな死体を見て私は理解した。

「ああ、そうか」

悲しくともなんもないはずなのに、心が震えているのを感じる。その振動が、まるでコップの水を溢れさせるように、自然に涙を流させた。

「あの時の泣き声、君のだつたんだね」

私を狂氣から“本当の”正氣へと引き戻し続けた声は、遂に途切れた。

生後二ヶ月の娘を虐待死させたとして、傷害致死罪に問われた母親の無職佐藤成美被告（25）の裁判員裁判の判決が23日、東京地裁であつた。裁判長は「誰よりも信頼し、味方であるはずの母親から暴行を加えられた被害者を思うと哀れというほかない」と述べ、懲役6年（求刑・懲役7年）を言い渡した。

判決によると、佐藤被告は昨年7月1日からの1ヶ月間に渡り、娘である女児に対し、手足を包丁などの刃物を使い切り落とすなどの暴行を加えたすえ、首を切りつけるなどして失血死させた。

弁護団は佐藤被告が犯行前に書いたとされる手記を取り上げ、被告人による実行行為の当時、責任能力は無かつたとして精神鑑定を求めていたが、佐藤被告自身の申し出により取り下げられていた。

手記によれば、佐藤被告は娘への暴行を自身を傷つける行為と錯誤していたようだ。また、「意識が途切れた」という文章から、この間に娘に対し救命行為を行つていたものと推察される。

(後書き)

短編は少し難しかったです。こちおうホラーのつまつで書きはじめましたが、終わってみれば悲しい話ではあっても、あまり怖くはなかつたですね・・・

最近こいつこいつ事件が絶えないのですが、やつきれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7739m/>

---

狂って候

2010年10月17日17時32分発行